**「喜びと楽しみが彼らを迎え**

**嘆きと悲しみは逃げ去る」**

**待降節第3主日・A年（16.12.11）**

**神は来てあなたを救われる**

去る、10月27日に文部科学省が発表した問題行動調査によると、全国の小中高校と特別支援学校が、2015年度に認知したいじめは22万4540件（前年度比19.4%増）で過去最多となったということです。さらに、先日のテレビのニュースでは、初めて「原発避難いじめ」という言葉で、横浜の中学生と新潟の小学生がそれぞれ避難先でいじめに遭っていると報道されました。しかも、新潟の場合は、なんと担任の教師までもが「菌」という言葉を付けて、その生徒を呼んだとのことであります。

　また、同じ文部科学省の発表ですが、年間30日以上欠席した不登校の子どもたちは、小学生が２万7581人（前年度比6.6%増）とこれまた過去最多ということです。

　さらに、いじめが原因で、神戸市の自宅のマンションから飛び降りて自殺した在日インド人の大学生の書き遺したメモには、**「学校で受け続けたイジメ・・・僕は、もう限界です。僕には居場所がありません。」**と書いてありました。

このように、教育の現場でいじめが増えている現状は、まさに大人の社会全体に蔓延しているいじめの構造の現れではないでしょうか。つまり、教皇フランシスコが、警告なさっておられる「排他性と格差のある経済」と「強者が弱者を食い尽くす競争社会と適者生存の原理」で構築されている今日の世界そのものの病根が根本的原因と言えましょう。

　そこで、今日のイザヤ預言は、実にこのような深刻な問題を抱えている私たちに告げられた預言として受け止めるべきではないでしょうか。

　確かに、預言者イザヤが叫んだのは、紀元前8世紀のユダ王国にが、神のことばは、まさに時間と空間を見事に超越しますので、、改めてイザヤが預言していると言えましょう。

　**「『雄々しくあれ、恐れるな。**

**見よ、あなたたちの神を。**

**敵を打ち、悪に報いる神が来られる。**

**神は来て、あなたたちを救われる。』**

**そのとき、見えない人の目が開き**

**聞こえない人の耳が開く。**

**そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。」**

ここで、言われている**「目」**と**「耳」**という機能と、**「躍り上がる」**と**「喜び歌う」**という二つの行動は、まさに人間全体を表わしています。

　なぜなら、神の救いこそが、全人的の広がっていくからのほかなりません。

　ですから、**「喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る。」**のであります。

**主が来られるまで忍耐しなさい**

ところで、今日の第二朗読で、使徒ヤコブは、極めて適切な勧めを与えてくれます。つまり、**「主が来られるときまで忍耐しなさい。・・・心を固く保ちなさい。主が来られるときが迫っているからです。・・・裁く方が戸口に立っておられます。」**と。

　ヤコブは、わたしたちが、主が栄光に包まれて再び来られる日を、忍耐強く待つように励ましてくれるのです。それは、ヨハネが預言しているように**「新しい天と地を見た。最初の天と地は去って行き、もはや海はなくなった。・・・そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人間の間にあって、神と人とが共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共におられ、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。』」（黙示21.1-4）**

**わたしに躓かない人は幸い**

次に、今日の福音ですが、第一朗読の預言が、イエスのよって見事に成就したことを確認していると言えましょう。ただ、6節で、イエスは、**「わたしに躓かない人は幸いである。」**と忠告なさっておられます。

　実は、ナザレの同郷人たちが、最初にイエスの躓いたとマルコ福音とマタイ福音がこぞって報告しております。ここで、マルコの方で確かめて見ましょう。

　**「イエスは、そこを去って、郷里に行かれたが、弟子たちもついて行った。そして安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。すると、聞き入っている多くの人々は、驚いで言った。『この人はどこからこういうことを授かったのだろうか。このような力ある業さえ行う知恵を持っているとは。この人は大工ではないか。・・・』このように人々は、イエスに躓いた。」（マルコ6.1-3）**

また、ペトロも、イエスの受難と死、そして復活の予告を最初に聞いたとき、躓いて、なんと、イエスをいさめたと言うのであります。

　**「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。『主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。』イエスは振り向いてペトロに言われた。『サタン、引き下がれ。お前は、わたしをつまずかせようとしている。お前は、神のことではなく、人間のことを考えている。』」（マタイ16.22-23）**と。

つまり、わたしたちは、神の考え方に切り替えなければ、イエスが誰であるかを悟ることができないのであります。それは、日々に回心か必要ということでもあります。

　なぜなら、預言者イザヤがいみじくも預言したように、**「神の思いは、人間の思いと異なり　神の道は、人間の道とは異なる。・・・天が地を高く超えているように、神の道は、人間の道を、神の思いは、人間の思いを、高く超えている。」（イザヤ55.8-9）**からにほかなりません。

　ですから、具体的には、神のことばと御心に、自分を根本的に合わせる、つまり日々の回心が必要なのであります。

　イエスは宣言なさいました。**「わたしの後に従いたい者は、自分を否定し、自分の十字架を担って、わたしに従いなさい。」（マタイ16.24）**

それは、日々、自分の考えや思い込みを捨てて、すなわち自分に死んで、ひたすら＜みことば＞に聞き従う生き方の実践にほかなりません。

　四旬節もいよいよ第三週目に入りました。この恵みの時に、信仰の生き方の再確認ができるよう共に祈りましょう。